

カール・マルクス著
フリードリヒ・エンゲルス編
長谷部文雄譯

資本論

經濟學批判

青木書店版

資本論 第四卷 (第三部上冊)

草 背 特 製 販

一九五三年八月一〇日發行
一九五五年三月三一日再版

定價 八百五十圓

譯者 長谷部文雄

發行者 青木春雄

印刷者 中内佐光

製本者 東京都千代田區飯田町一ノ二三
本間清四郎
東京都文京區東古川町一〇

發行所 東京都千代田區
神田神保町一ノ六〇
株式會社 青木書店

電話東京 (29) 一九〇四番
振替東京 三六五八二番

印刷 株式會社・印刷 製本 本間製本所・製本

目次

編集まえがき (M・E・L 研究所)	一
序言 (エンゲルス)	一五
補遺 (エンゲルス)	四二
〔I 價值法則と利潤率〕	四三
〔I 取引所〕	六七

第三部 資本制的生産の總過程

第一篇 剩餘價値の利潤への轉形と、剩餘價値率の

利潤率への轉形

第一章 費用價格と利潤	七三
第二章 利潤率	九一

第三章 利潤率の剩餘價值率に對する關係…………… 101

〔第一節 m' は不變で v 、 C は可變な場合〕…………… 104〔一、 m' と C は不變で v は可變な場合〕…………… 104〔二、 m' は不變、 v は可變、 C は v の變化によつて變動する場合〕…………… 104〔三、 m' と v は不變、 c 、したがつて C も可變な場合〕…………… 105〔四、 m' は不變、 v 、 c 、および C がすべて可變な場合〕…………… 106〔第二節 m' が可變な場合〕…………… 107〔一、 m' は可變で v 、 C が不變な場合〕…………… 107〔二、 m' および v は可變で C が不變な場合〕…………… 108〔第三節 m' 、 v および C が可變な場合〕…………… 108

第四章 利潤率に及ぼす回轉の影響…………… 110

第五章 不變資本充用上の節約…………… 113

第一節 概 説…………… 113

第二節 労働者を犠牲としての労働諸條件の節約…………… 115

〔炭礦。最も必要な投資をもゆるがせにすること、一五三、——工場、一五五、

——屋内一般における労働、一五七〕

第三節 動力作出・動力傳達および建物における節約…………… 116

第四節	生産上の廢物の利用	一六
-----	-----------	----

第五節	發明による節約	一七
-----	---------	----

第六章	價格變動の影響	一七
-----	---------	----

第一節	原料の價格動搖、利潤率に及ぼす直接的影響	一八
-----	----------------------	----

第二節	資本の價值増大と價值減少、遊離と繫縛	一八
-----	--------------------	----

第三節	一般的例證、一八六一—六五年の棉花恐慌	一九
-----	---------------------	----

〔前史、一八四五—六〇年、一八六一—一八六四—一八六四年。アメリカの南北戦争。棉花飢饉。原料の缺乏と騰貴による生産過程中断の最大實例、二〇、——棉屑。東インド棉花(スラート)。勞働者の賃銀に及ぼす影響。機械の改良。澱粉および鑛物による棉花の代用。この澱粉整絲が勞働者に及ぼす影響。細番手絲の紡績業者。工場主の欺瞞、二〇、——無價值體での實驗、二一、——家賃、二二、——移住、二三〕

第七章	補遺	二四
-----	----	----

第二篇 利潤の平均利潤への轉形

第八章	相異なる生産諸部門における資本の構成の相違とその	
-----	--------------------------	--

結果たる利潤率の相違	二九
------------	----

第九章	一般的利潤率（平均利潤率）の形成と商品價值の生産價格への轉形……………	二八
第十章	競争による一般的利潤率の均等化。市場價格と市場價值。超過利潤……………	二六〇
第十一章	勞賃の一般的動搖が生産價格に及ぼす影響……………	二九六
第十二章	補遺……………	三〇三
第一節	生産價格の變動を生ずる諸原因……………	三〇三
第二節	中位的構成の商品の生産價格……………	三〇五
第三節	資本家の補償理由……………	三〇七
第三篇	利潤率の傾向的低落の法則	
第十三章	法則そのもの……………	三一
第十四章	反對に作用する諸原因……………	三九
第一節	勞働の搾取度の増大……………	三七
第二節	勞働力の價值以下への勞賃の引下げ……………	三三

第三節	不變資本の諸要素の低廉化	三四
第四節	相對的過剩人口	三四五
第五節	對外商業	三四六
第六節	株式資本の増加	三五〇
第十五章	法則の內的諸矛盾の開展	三五二
第一節	概 說	三五二
第二節	生産擴張と價值増殖との衝突	三五六
第三節	人口過剩のもとでの資本過剩	三六三
第四節	補 遺	三七五

第四篇 商品資本と貨幣資本の商品取扱資本と貨幣取扱

資本への轉形(商人資本)

第十六章	商品取扱資本	三九五
第十七章	商業利潤	四〇三
第十八章	商人資本の回轉。價格	四三二

第十九章	貨幣取扱資本……………	四八
第二十章	商人資本に關する歴史的考察……………	四九
第五篇	利子と企業者利得への利潤の分裂。利子生み資本……………	
第二十一章	利子生み資本……………	四七
第二十二章	利潤の分割、利子歩合、利子歩合の『自然』率……………	五〇
第二十三章	利子と企業者利得……………	五五
第二十四章	利子生み資本の形態における資本關係の外面化……………	五五
第二十五章	信用と假空資本……………	五六
第二十六章	貨幣資本の蓄積。利子歩合に及ぼすその影響……………	五九
第二十七章	資本制的生産における信用の役割……………	六九
第二十八章	流通手段と資本。トウーク及びフライトンの見解……………	六九

編集まえがき

フリードリヒ・エンゲルスは、ダニエルソン宛の書簡で『資本論』第三部を、彼の讀んだ最も驚嘆すべきもので、『第一部でさえその前には影の薄い、終結たる畫龍點睛的な部分』（一八八五年四月二十三日付）と呼んだ。前の二部、殊に第一部に對するこの第三部の關係については、すでに序文〔第一部〕で論及した。レーニンの『カール・マルクス』と一八六八年四月三十日付エンゲルス宛のマルクスの書簡は、第三部の内容にかんする概觀を與えている。^{*}本巻第一章の冒頭に、讀者は今また、全三部の關係および第三部の意義についての、しかもマルクス自身による敘述を見出す。

自明のことであるが、第三部のこの現實的意義は、一九二六年に背教者K・カウツキーが自編第二卷の英雄氣どりで『有名な』序言中で第三部に與えた『意義』とは毫末も關係がない。けだし、彼カウツキーは、生産過程での『階級闘争』に流通過程での階級調和を對應させ、第一部に第二部および第三部を、今日の社會民主主義的階級有和政策の特に『實際的』な理論的基礎づけとして對應させているからである。そんなものではない！ 生産過程と流通過程とは實踐的統一であって、この統一は前者によって決定的に規定されているのと同様に、『資本論』全三部は不可分な理論的統一であって、この統一の基礎は第一部である。第二部および第三部は、もちろん、マルクス主義の根本思想——これをカウツキーは第一部でも採み消している——たるプロレタリア獨裁の敎説の制限ではなく、むしろ反對に、その繼續であり、深化である。

* 第一部第一分冊五一—五五頁、および原典第一卷八三—八三七頁参照。

エンゲルスはその晩年の諸書簡でこの『資本論』第三卷が演ずる大きな役割にたび／＼論及したとき、見當ちがいはいしなかった。特にここで論及すべきは、マルクス主義の理論および實踐の發展にとつての第三卷の意義である。第三卷が階級闘争におけるプロレタリアートの理論的武器としての役割を演じきたり今後もお演ずるであらうな、かんづく、三つの巨大な科學的業績、——それは、利潤率の法則の發見、資本集中の諸形態および獨占への移行の分析（な、かんづく、利子生み資本に關する篇における）、および、地代の分析である。

第三卷の出版當時には、理論的關心の前景に浮び上つたのは殆んどもっぱら最初の三篇、すなわち、マルクスが剩餘價値の利潤への轉形、價値の生産價格への轉形、利潤率の均等化、および平均利潤率の傾向的低落、を敘述した諸篇であつた。『從來の經濟學は、基礎としての價値規定を保持しうるために、剩餘價値と利潤・剩餘價値率と利潤率の區別を暴力的に捨象するか、さもなければ、現象上で目だつ右の區別にしがつくために、この價値規定とともに科學的な仕方の一さの基礎を放棄するかした』（第二分冊、原一九三—四頁）という、マルクスによつて語られた窮境——この窮境はいまや次ぎのような新形態をとる。すなわち、『資本論』第一部と第三部との間の『矛盾』についての饒舌の形態（な、かんづく、ベーム・バヴェルク）、および、觀念論的解釋によつての價値規定の解消の形態がそれである。エンゲルスは第三卷への補遺*で第三卷の反響を極めて注意ぶかく跡づけ、ロリア一派の平凡な攻撃を適當に片づけると同時に、マルクスの教説を表面的に承認しながら淺薄化してその革命的鋒先を挫こうとする最初の試みをも却けている。ゾムバルト教

(6*)

授は價值を單なる『論理的』事實に轉化し、社會民主主義者コンラート・シュミットはこれを『虚構』に轉化した、價值法則のかかる觀念論的偽造にたいするエンゲルスの補遺での論駁を参照せよ。エンゲルスがここで決定點に觸れたことは歴史によって證明された。價值の觀念論的理解は今日では、『組織された資本主義』に關する社會ファシスト的理論家たちの共有財であつて、ゾムバルト教授は『親マルクスの』剽竊者から惡意的『マルクス殺害者』への羽毛脱換により、彼のいう『マルクス體系の一そうの展開』が何ものたるかを充分に示した。

* 編集部はこの補遺を、——第一卷へのマルクスの後書きの例にならい、——序言のあとに挿入した。この補遺は内容的にすぐ序言につながるものであつて、讀者に對し、第三卷、なかんづくその前半の研究への不可缺な手引きを與える。

最初の三篇がまさに今日、資本主義の一般的危機の基礎上で演ぜられた歴史上で最も深刻かつ最も破壊的な經濟恐慌にさいし、高度な理論的および實踐的現實性を得たということは、ここに今さら證明するまでもない。マルクスはここで、利潤率において『資本制的生産の推進力』を示し、不變資本の節約に關する章では（第一部第四篇と相並んで）最近行われた資本制的合理化を分析するための基礎たるものを與え、最後に、利潤率の傾向的低落に關する篇では、資本制的生産の總過程の敵對および矛盾——これらは、週期的な恐慌のたびに明るみに出たのであつて、獨占的な腐朽し死滅しつつある資本主義の到來とともに、不可避免的にプロレタリア革命を、したがって資本主義の崩壊を、招來する——の壯大な包括的敘述を與えている。

やつとエンゲルスの死後、資本主義がこの最後の段階たる帝國主義に移行するにつれて、第三部

第五篇も科學的および政治的關心の焦點に押しやられた。それも偶然でない。というわけは、ここで——殊に第二十七章において——マルクスは、生産の集中から出發して、信用の、および信用によつて可能となる資本集中の形態たる株式會社・銀行の役割・等々の、光彩陸離たる分析を提供し、また、自由競争から獨占への移行を豫言しているからである。エンゲルスは——本卷のここかしこで——編集上の挿入や註（本分冊一九四頁、第三分冊原四七八—九頁参照）により、右の分析を一八九四年の状態にまで及ぼし、これらの新現象——ことに取引所の新たな役割——を『補遺』の第二節で取扱おうと企てた。彼の病氣と死によつて完成されなかつたが、その草稿が最近、マルクス・エンゲルス・レーニン研究所にあるエンゲルスの遺稿中に發見された。それは天才的スケッチ『取引所』である（本分冊六七頁以下）。資本主義の新たな獨占的な段階の若干の要素がやつと出來あがつたときに書下されたとはいへ、この草稿はすでに直接に、レーニンの帝國主義分析への導きをなしている。ここには、研究の結果のみならず仕方においても、これはと驚くほどの一致が見られる。すなわちエンゲルスは、——後にレーニンもそうしたが、——生産から出發して（カウツキー、ヒルファードینگ、レンナー一派のように流通から出發しないで）、生産の集中・資本の集積および集中・の新段階、その結果たる株式會社形態の一般化、トラスト形態での産業的獨占の成立、産業の『取引證券化』すなわち取引所の（したがって銀行資本の）産業資本との絡みあい、列強による資本輸出と植民地の獨占化（アフリカの分割）、を示した*。

* 附録に収める「とあるが收められていない——譯者」エンゲルスの論文『イギリス、一八四五年と一八八五年』は、『資本論』起草後の數十年間におけるイギリスの労働者階級の狀態を一八八五年に書いた説明

であつて、マルクスによつて發見された資本制的蓄積の一般的法則を完全に確證すると同時に、また、イギリス（イギリスでは産業獨占の結果として、帝國主義段階の個々の現象がすでに前世紀の最後の三分の一期に生じた）を例として、これまたレーニン、の帝國主義分析に導く諸事實、すなわち、プロレタリアートの分裂、廣泛なプロレタリア大衆の一その窮乏化のもとでの労働者貴族の成立、をつきとめてゐる。

第三部第五篇は現在では特に現實性がある、というのは、資本主義諸國ではつぎ／＼と經濟恐慌が貨幣恐慌を招來し、帝國主義列強間の金をめぐる鬭争がますます／＼尖鋭な形態をとり、『金流出の各伍發射』（マルクス〔第三部、原五三七頁參照〕が國々をつぎ／＼に把えるからであり、資本主義諸國ではつぎ／＼に金本位制が崩壊して政府は世界市場の分前をめぐる鬭争にインフレーションを手段とするからである。なお一つ強調すべきは、利潤の利子と企業者利得とへの分裂に關するマルクスの光彩陸離たる分析（特に第二十三章における）である。この分割は量的分割から質的分割に轉化するのであつて、詳言すれば、利子は唯一の搾取果實として現象し、企業者利得は監督賃すなわち『勞賃』として現象する。これらの逆立した現象形態に照應するのが、金貸資本家に對比して自らを『労働者』となす企業者の『頭腦における』表象である。——ここでマルクスはすでに七十年前に一つのイデオロギーを空に歸せしめてゐるが（『資本論』第一卷およびそれ以前の諸著述で彼がこの種の資本辯護論に加えた決定的打撃ののち）、これは、今日のドイツの國家『社會主義』により『創造的資本』なる欺瞞において、特殊なデマをもつて資本主義擁護のために利用されてゐるイデオロギーである。生産の前進的集中の結果として生産には資本家がなくてもすむという命題は、——これをマルクスは資本家の株式會社および労働者の生産組合を例にして説明しえたにす

ぎないが、——今日ではソヴェト同盟における十月革命および社會主義建設によって、その本來的で完全に窮極的な確證を見出した。

地代にかんする篇——マルクスはこれを『それだけでまとまった書』と書き、レーニン、これは『最重要なもの』と呼んでいる——は、事實上、第三部全篇のうち最大の自立的意義を有する。これは、差額地代および絶對地代の分析において農業問題に對するマルクス主義の立場の理論的基礎を與え、建築地地代・鑛山地地代・および土地價格の諸現象を研究し、そして、農業における資本主義の發展にかんする壯大な歴史的概觀、小土地所有の分析、および、小土地所有の破滅の不可避性の證明——これは最近數十年間の發展により、殊に、資本主義の一般的危機の部分として開展される現在の世界農業恐慌によって、完全に實證される——をもって終る。この分析に基づいて、マルクスはすでに一八七三年に、バクーニンの著書『國家性と無政府』に加えた評註（ドイツ語では未刊）で、共產黨の農民政策の輪廓、すなわち、プロレタリア革命における小（貧および中）農層に對する共產黨の方策を確立している。

マルクスは書いている、——『農民が大衆的に私的所有者として實存する所では、西ヨーロッパ大陸のすべての國のように農民がむしろ多かれ少かれ大多數をなす所では、イギリスのように農民が消滅せず農業日雇労働者によって置換えられていない所では、つぎのような場合が生ずる。すなわち農民が、從來フランスでやってきたように、あらゆる労働者革命を妨害し挫折させるか、さもなければ、プロレタリアートが（けだし土地所有農民はプロレタリアートには屬しないから、——また、農民自身はその状態からみてプロレタリアートに屬する場合でも農民はそうだとは信じ

ないから）施政として、農民がよって以て自分の状態を直接に改善するような處置、つまり農民を革命の味方たらしめるような處置を、しかも萌芽において土地の私的所有から集團的所有への移行を——農民がおのずから經濟的にそこに赴くというふうに——容易ならしめるような處置を、とらねばならぬか、そのいづれかである」と。

賃労働を搾取していない小農を『革命の味方たらしめ』、そして小農のために『土地の私的所有から集團的所有への移行を容易ならしめる』政策、これこそはまさに、レーニンが（しかも上述のマルクスの指示を知ることなく）十月革命の勝利後ただちに、一九一七年十月二十八日（十一月十日）の土地に關するかの有名な訓令で具體的に適用した政策であった。曰く、領地所有者から取上げた土地を農民に譲渡すること、但し土地國有化のもつで。スターリンが一九二九年のソヴェト同盟農業科學者會議での演説で強調したように、土地國有化は、集團經營運動が比較的容易かつ迅速に發展した原因の一つであった。それは、ロシア農民經濟の世界史的變革、すなわち、一九二九—三二年における一般的集團化の基礎上での資本家的大農（クラーク）階級の解消——その決定的前提はプロレタリアートの獨裁であった——を、著しく容易にしたのである。

第六篇は、すでに第三部の出版當時、日和見主義に對する鬭争の猛火中にあった。エンゲルスはフランスおよびドイツにおける農民問題に關する有名な一八九四年の論文（その決定的部分を第三卷の附録に收める^{〔實は收められていない——譯者〕}）で、この鬭争上の諸問題を特に明確に提起している（一八九四年十一月十日付ゾルゲ宛の書簡をも参照）。レーニンはナロードニキ（ブルガコフ一派）および修正主義者（E・ダヴィッド）に對する鬭争をつづけ、マルクスの地代理論をロシア、合衆國その他の

國々の農業事情に具體的に適用し、この基礎上でプロレタリアートの農民層に對する戰略および戰術を創造した。附録に收めるレーニンの一九〇一年の勞作中の斷片^{*}は、土地私有の廢止によつて絶對地代および土地價格を止揚したプロレタリアートの農業政策にとつてのマルクス地代理論の基礎的意義を特に明示している。スターリンは前述の演説でいう、——『土地の國有化にさいし、吾々はなかんづく、「資本論」第三卷、マルクスの有名な著述「剩餘價值學說史」、および農業問題に關するレーニンの諸勞作、——これらは理論的思想の最も豊富な寶庫をなす——のうちに與えられている理論的諸前提から出發した。というのは、一般的には地代理論のことであり、特殊的には絶對地代の理論のことである。これらの著作の理論的諸思想が都市および農村における吾々の社會主義的建設によつて燦然と實證されたということは、いまや何びとにとつても明白である』と。

^{*}『地代論』、『農業問題と「マルクス批判者」』中の第二章。——譯者。

最後になお言及すべきは第七篇『收入とその源泉』であつて、その意義をレーニンは極めて重要視している。マルクスはここで、俗流經濟學の絶滅的批判を提供し、特に經濟學的諸範疇の階級性を明白に暴露し、そして、剩餘價值の利潤と地代への分裂の・および剩餘價值の勞賃への對立の・すなわち——エンゲルス宛の書簡で云っているように——『この現象的形態における總運動』（第一卷原八三七頁參照）の・直接に階級分析で終る總括的敘述をもつて、この著作を結んでいる。この終結篇は、現在では、資本主義から共產主義への過渡期の經濟學的諸問題に對する一連の論及によつて、大きな理論的および實踐的意義をもつものである。